

世阿弥の『実盛』と將軍義持

天野文雄

白くなつた鬢髪を黒く染め、大将が着る錦の直垂を特に許されて、出身地の北国に「錦を飾る」思いをこめて出陣し、加賀篠原で義仲の郎等手塚太郎に討たれた老武者実盛の亡霊が終焉の地に現われ、時衆の十四代遊行上人(太空)から濟度されるといふ内容の世阿弥作『実盛』ほど、その制作の時期や経緯が特定できる能も珍しい。

それというのも、『実盛』については、実盛最期を伝える『平家物語』のほかにも、『満濟准后日記』(応永二十一年(一四一四)五月十一日条に、「斎藤別当真盛靈於加州篠原出現、逢遊行上人、受十念云々。去三月十一日事歟。卒塔婆銘令一見了。実事ナラバ希代事也」とある記事が知られており、さらに遊行十三代自空、十四代太空、十五代尊恵三代の事績を絵入りで記した、応永二十四年頃の制作らしい『遊行縁起』(神奈川県立博物館蔵)の太空(永享十一年(一四三九)没)の事績に、『満濟准后日記』や『実盛』にほぼ合致する記事のあることが知られているからである。

このうち、『満濟准后日記』の記事は、はや

く築土鈴寛氏「謡曲に現れたる怨霊思想」(『古典研究』昭和十三年一月)で『実盛』との関係が指摘されていたが、これが能楽研究者に知られるようになったのは、世阿弥生誕六百年だった昭和三十八年一月の『文学』世阿弥特集号に寄せられた米倉利昭氏の「能の素材と構想——『実盛』の能を中心に——」によつてであつた。

一方、『遊行縁起』のほうは、江戸後期の『謡曲拾葉抄』に、『遊行縁起』の記述を簡略にしたような実盛濟度譚が素性不明の「時宗縁起」なる書からの抄出として引かれていたが、この書と『実盛』の関係は、近代の能楽研究では注目されることがなかつた。しかるところ、昭和四十四年の『日本仏教』に時衆史研究の大橋俊雄氏によつて、『満濟准后日記』の記事とさほど隔たらない応永二十四年頃の制作とされる『遊行縁起』が紹介され(同氏『時衆の成立と展開』に再録)、その結果、『実盛』については、この『遊行縁起』と『満濟准后日記』の記事をふまえた論として、能楽研究では中村格氏「実盛奇蹟の正体」(『鎮仙』昭和五十年四月)、「実盛」の周辺」(『室町能楽論考』平

成六年、わんや書店。初出は平成三年、同五年)が、時衆研究では今井雅晴氏『中世社会と時衆の研究』(昭和六十年、吉川弘文館)などが出ている。

もっとも、これらの論は、いずれかといえれば遊行上人による実盛濟度を室町時代における時衆の亡霊供養活動という視点から論じているため、『実盛』の制作時期は、『満濟准后日記』の応永二十一年五月以降、曲名の初見である『三道』の応永三十年以前と幅をもつて考えられているが、『実盛』は『満濟准后日記』の応永二十一年五月十一日からまもない時期に、『遊行縁起』のような巷説に拠つて作られたとしてよいかと思う。『実盛』のような能は、なんといつても時事性が命だからである。そして、これを補強する資料も近年報告されている。

それは宮本圭造氏が平成二十三年発行の『能楽研究』三十五号に寄せた「戦国期能楽伝書の伝来をめぐる一考察——『聞書色々』と『細川十部伝書』」に全文が翻刻された金春家旧蔵の能伝書『聞書色々』の記事である。『聞書色々』は現在は法政大学能楽研究所の有に帰しているが、そこに六世観世大夫元広(道見、大永三年(一五二三)没)の発言として、次のような記事がみえている。

一、実盛能に作る事、加賀国上人の御まへへ、実盛幽霊来たるを天下へ奏聞申。此時、公方様、観世世阿弥に能につくれと被仰出。即作らるゝと云へり。

この記事は今を去る二十年ほど以前、能楽学会の前身世阿弥忌研究セミナーにおいて、宮本氏が新資料『聞書色々』を紹介するなかで少し触れられたものだが、当時、世阿弥の作品と将軍との関係という鉅脈に気づきはじめていた筆者は、世阿弥より後の資料だが、ほかならぬ観世大夫の発言でもあり、瞬時にその信憑性を確信した記憶がある。

『能楽研究』の宮本稿によれば、『聞書色々』はいくつかの能伝書の集成で、そのうちの観世元広はじめ信光、長俊など観世座関係の役者の芸論や型付は、もとは観世座とのかかわりが深かった若狭武田氏やその被官のもとにあったのが、武田氏滅亡後、武田氏と縁戚関係にあった細川家に移り、それに細川家にあった世阿弥伝書『五音下』の写しなどを加えて成ったもので、その写しが細川家の分家宇土細川家に伝わっていたのが、江戸時代に宇土細川家と交流があった金春大夫重業(宝永五年没)の時代に金春家にもたらされたものという。とすれば、この『実盛』制作についての大夫元広の発言は世阿弥没後六十年ほど後の観世座における伝承ということになる。宮本氏はかつての世阿弥忌研究セミナーの時と同様に、右の稿においてもこの記事の資料的価値に言及しているが、『満濟准后日記』にこの『聞書色々』の記事を勘合すると、篠原における実盛済度の巷説が時の将軍義持の耳にも入り、ただちにこの出来事を材料にした能の制作が世阿弥に命じられたという経緯が想定さ

れるのである。

さて、義持と『実盛』の関係という点では、次の『申樂談儀』十四条の記事が注目される。

祝言の外には、井筒・通盛など、直成能也。実盛・山姥も、そばへ行きたる所有。

殊に、神の御前、晴れの猿楽に道盛したき也と存れ共、上の下知にて、実盛・山姥を当御前にてせられし也。

右は表章氏の校注になる日本思想大系『世阿弥禅竹』の校訂本文だが、いま注目したいのはその後半である。そこには世阿弥が「神の御前、晴れの猿楽」に『通盛』を演じたいと思っていたところ、「上の下知」によって、それがかなわず「当御前」で『実盛』と『山姥』を演じたとある。

ここは実は「神の御前」を「上の御前」とする立場と、「当御前」を義教か義持かとする立場があつて、見解が分かれている箇所なのである。

このうち、「神の御前」のほうは本文の問題である。伝存のテキストではここはいずれも「神の御前」で、戦前の『世阿弥十六部集評釈』以来、「神の御前の能」と解されていたのだが、昭和四十九年の『世阿弥禅竹』にいたって、本文は伝存テキストに従つて「神の御前」としつつも、頭注では「上の御前」の誤写か」とする新しい見解が提示されている。

『世阿弥禅竹』ではスペースの制約もあつてであろう、「神の御前」を「上の御前」の誤写かとした理由は示されていないが、現在でも夫人のことを「かみさん」と呼ぶように、「上」は

当時は将軍など貴人の正室を意味する言葉だった。世阿弥に近いところでは、将軍義教や義政の御台所が「上様」と呼ばれている例があるが『看聞日記』『亂河原勸進猿楽記』など、これはウエサマではなくカミサマのはずである。とすれば、新たに提起された「上の御前」は将軍の御台所の可能性が出てくるのだが、はたして、この催しは応永二十六年二月三十日に義持室の栄子の御所で義持も同席して催された演者不明の能のことではないかと思われる。すなわち、『満濟准后日記』同一条に、

参御所。御対面。御参籠無為珍重由申入。今日於御所御台猿楽在之云々。

とあるのがそれである。これは義持がこの時期恒例の北野社参籠から戻った日の能で、義持の誕生日(二月十一日)の祝賀の一環だったらしい(同日条に「正御誕生」とある)。とすれば、それは「上の御前、晴れの猿楽」にふさわしい催しである。義持の誕生祝いなら、義持も御台所とともにその御所で能を観たはずで、この記事もそう読めそうである。となると、『申樂談儀』十四条の「神」は『世阿弥禅竹』が指摘するように、「上」の誤写か、あるいは後続の「上の下知」の「上」との重複を不審に思つての改変で、この箇所は「御台所の御前の晴れの猿楽で、自分(世阿弥)は『通盛』を演じたいと思つていたが、上(義持)の命令で『実盛』と『山姥』を当御前(義持の御前)で演じた」の意となるであろう。

一方、「上の下知」の「上」は伝存テキストは

いずれも「うへ」で、これは続く「当御前」のことと思われる。その「当御前」については、前述のように、義教とする説と義持とする説があるが、以上の私解に従えば、この「当御前」は当然、義持となる。

このように、『申楽談儀』十四条の記事は『満濟准后日記』が伝える応永二十六年の催しである可能性が高いのだが、これに『聞書色々』の逸話を併せると、義持は自身が制作を命じた『実盛』を気に入っていて、自身の誕生祝賀の場で老武者の矜持を描いた『実盛』を演じさせたことになり、『聞書色々』の記事とも響き合う。とすれば、このときの「猿楽」は当然、世阿弥の所演で、少なくとも、『実盛』と『山姥』が演じられたことになり、さらに応永三十年の『三道』にみえる禅趣味横溢の『山姥』も義持のお気に入り、『山姥』はこの催し以前に制作されていたことにもなるわけである。

室町幕府は初代將軍尊氏以来、義満も義持も義教も、またそれ以後の將軍も一貫して時衆を保護している。そのことは望月華山氏の『労作』時衆年表(昭和四十五年、角川書店)に明らかだが、室町將軍のなかでは義持による保護の事例が目立っている。その初見は応永十八年で、そのとき義持は太空の前の遊行十三代の自空に内書を寄せている。義持の時衆への関心は応永二十一年の太空による実盛濟度という出来事以前からのものだったのである。

(京都芸術大学舞台芸術研究センター所長)